

平成 22 年 5 月 24 日現在

研究種目： 若手研究 (B)  
研究期間： 2007~2009  
課題番号： 19720220  
研究課題名 (和文) ネパール西部ヒマラヤ地域における人口動態とその影響に関する研究  
研究課題名 (英文) Population dynamics and its impacts on the Himalayas in Western Nepal  
研究代表者：  
森本 泉 (MORIMOTO IZUMI)  
明治学院大学・国際学部・准教授  
研究者番号：20339576

## 研究成果の概要 (和文)：

今日過疎化が進むネパール北西部ヒマラヤ地域において、人口動態とその影響を明らかにすることを目的とする本研究で明らかにされた主要な点は次の通りである。長期的な人口減少に加え季節移動があり、それを補うために近隣から労働力人口流入も見られた。しかしながらこの村人の流出、また気温上昇による氷河の後退、水源の枯渇により耕作放棄が進行していた。厳しい自然環境の中で村人は再生エネルギーを積極的に利用するなど、環境意識が高いことが明らかにされた。

## 研究成果の概要 (英文)：

The main points showed by this research aiming at clarifying population dynamics and its influence in the northwestern Nepal Himalaya area which decrease in population follows today are as follows. The long-term decrease in population and seasonal migration in this area bring inflow of work force. A decrease of population and drain of water resource from glacier make cultivation abandonment worse. In this severe environment villagers utilize renewal energy so that their environmental awareness became high.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	700,000	0	700,000
平成 20 年度	500,000	150,000	650,000
平成 21 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	300,000	2,000,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：ネパール、ヒマラヤ、人口動態、地誌、環境

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した背景に、筆者がこれまでネパールの首都カトマンドゥにおける変化を、ツーリズム空間を中心に明らかにしてきた研究蓄積がある。ヒマラヤ地域に研究範囲を広げようと考えたのは、カトマンドゥの

変化はグローバル化の影響を受けているだけでなく、その背後にある人口流出地域であるネパールの山村と切り離して考えられないと感じるようになったからである。カトマンドゥにはネパール各所から人口が集中し、諸機会が集積し、インフラが整い、地方との

格差は歴然としている。この格差は、1990年代半ば以降に始まったマオイスト（毛沢東主義派）による反政府運動の背景になっている。このような格差が拡大する過程は、カトマンドゥの成長としてとらえるだけではなく、人口流出地域であるヒマラヤ地域の過疎の実態を明らかにすることで複眼的にとらえなければならないと考え、ヒマラヤ地域の現地調査を行うに至った。

標高の高さ及び地形により生態的に脆弱な環境にあるヒマラヤ地域において、地域維持を外部に求め、早くから交易や出稼ぎが行われてきた。かつては村に戻っていた人口がやがてカトマンドゥに移住するようになり、村は過疎化が進行するようになった。地域外に経済機会を求めてきたヒマラヤの山村の人々が外の世界と接する過程で、彼ら彼女らの住む場所をカトマンドゥへ移すことになった理由は何なのか、また移した先の都市は何が起こっているのか、このような人口動態を人口送り出し側から見ようというのが、本研究の背景にある。

## 2. 研究の目的

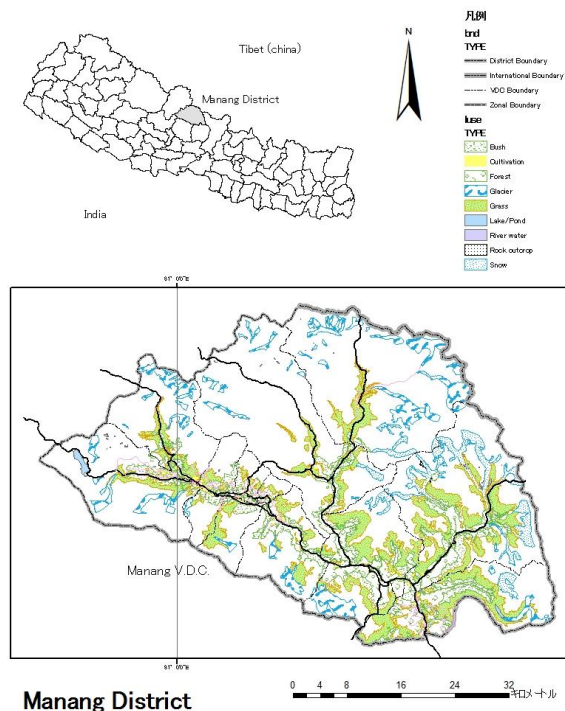
20世紀半ばにネパールの中でも最貧地域とされた北西部マナン郡において、人口動態とその影響を明らかにする。20世紀半ばまではマナンの隣接地域で交易を行ってきたが、時の国王マヘンドラの計らいにより国際貿易に優先的に進出するようになった。その結果、村人達は香港やシンガポール、マレーシア等との国際貿易を通じ、資本蓄積するようになり、やがてポカラやカトマンドゥに土地を買い、移住するようになった。このような状況に変化をもたらしたのが、ツーリズムであった。車道から徒歩一週間かかるマナンにまでトレッカー達は歩いて訪れる。外国人観光客が訪れるようになってから、かつてカトマンドゥに移住した若者の中にはマナンに戻ってロッジを開業する者も出てきた。本研究では、このような近年の変化を踏まえ、過疎化の状況、ツーリズムをめぐる変化に着目し、村の古老や新規事業を始めた村人、マナンに戻ってきた若者達を対象に聞き取り調査を行い、現状を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

主たる研究方法は、2007年、2008年、2009年の3回にわたって行った現地調査である。筆者が調査に行ける時期が8-9月しかなく、時期的にモンスーンが終わり、トレッキング・シーズンに向けて準備を始める頃であるため、経営者がカトマンドゥから戻って来るか来ないかの頃で、準備状況を観察することができた。その半面、観光客が少なく、開店休業状態であったり、開店すらしていな

かったり、活況を呈する状況とは程遠かった。2007年度はマナン郡を広く歩き、どの村で調査を行うか予備調査を行った。その結果、ロッジ等が最も集積しているマナン村で調査を行うことに決めた。2008年はマナン村でツーリズムに携わる人々に調査を行い、いつ、何がきっかけでツーリズムに参入し、その結果どのような変化を経験しているのかを聞き取りから明らかにした。2009年も主たる調査地はマナン村で、そこから徒歩1~2日の山小屋でロッジを経営しているマナン村のキーパーソンである旧村長で、数箇所にロッジを持っている村人から歴史的にマナン村の変化を聞くことができた。

現地調査に並行して、カトマンドゥで資料収集を行った。当該地域の変化を面的に明らかにするために出ている地図をあるだけ収集し、最新のものをGIS用にデータ化した。研究対象地域は下の通りである。



#### 4. 研究成果

##### (1) 人口動態

センサスから見た人口の推移は下表の通りであった。

表 世帯数/人口の推移

	1971	1981	1991	2001
Khangsar		96	70	103
Tanki Manang		154	93	160
Manang		138	120	227
Bhraka		161	65	189
Ngawal		223	123	178
Ghyaru				
Pisang			96	142
Upper Manang計	971	782	567	1,000
同上 人口(人)	5,810	3,469	1,849	5,534

Source: Population Census 1971, 1981, 1991 & 2001

マナンでは、1991年にかけて人口が減少しているものの、2001年になると急増している。観察からは耕作放棄地の増加や家屋の倒壊など、過疎化が進行しているようにしか見えなかった。村人は、これまで登録していなかった人口を登録するようになったことが原因と語るが、その理由は当時連邦共和国にする際にマナン郡を隣接するラムジュン郡に吸収合併する恐れがあると考えられたからであった。実際には上記マナン郡7村の1,000世帯中(2001年)、622世帯がカトマンドゥに何らかの形で住んでいる。カトマンドゥにはマナン出身者が集住する地域ができており、マナンのことでもカトマンドゥ在住のマナン・コミュニティの影響力は看過できないという。また、カトマンドゥ以外に外国への移住も少なくない。

他方、マナンはカトマンドゥや外国への移住者がいるため、マナンにおいて労働力が不足し、近隣から労働者の流入を招いている。隣郡ゴルカや遠くインドからも出稼ぎ者たちが集まっている。他方でツーリストが乾季(降雪期以外)を中心に滞在することから、単なる人口送り出し地域ではなく、人口が流入し、流動的であることが明らかにされた。

##### (2) 環境変化

近年当該地域において氷河が後退して水源が枯渇し、氷河湖が年々拡大している。また人口減少や社会の変化により、耕作放棄地が増大している。十分な労働力があれば灌漑施設を設置することもあるだろうが、行われていないのが現状である。その中でツーリズムは格好の経済機会になっている。他方、ツーリストが増加することによって薪炭伐採量が増え、1980年代から1990年代にかけてホテル建設のために木材需要が高まったために、森林が減退したといわれている。そのため、現在は森林保全のために資源利用が規制され、1990年代から太陽光発電、太陽熱

温水器、竈の湯沸かし装置等が普及するようになった。また、外国の援助で配布されたソーラークッカーも当該地域に広く普及し、バイオ・ガスの試行も始められている。これらのことが、村人の環境意識を高めることにつながっているといえる。

マナンでは地域社会が出資して水力発電所を設置し(2010年から稼働予定)、また4、5年後に開通する予定で車道整備の工事が進められている。しかしながら、隣接するムスタンの車道開通の例からトレッカーの減少が予測され、ツーリズムへの期待に陰りが生じている。

##### (3) 社会変化

マナン村内でロッジを経営している経営者の概観を以下の表に示した。表より、ツーリズムに参入する以前から村人たちはマナンの外に経済機会を求めていたことが明らかにされた。1980年代以降ネパールにおいてツーリズムが基幹産業に位置付けられ、やがてアンナプルナはネパールを訪れるトレッカーのうち60%(エヴェレストは26%)が集まる人気ルートとなっていく(2007年、Nepal Tourism Statistics 2008)。しかしながら、トレッキングルートが通行困難になる雨季(6~8月)と積雪して峠が閉ざされる冬季(12~2月)は殆どトレッカーが訪れなくなり、季節変動が大きい。このような状況を受けて、冬季になると避寒目的でマナンの人々も親類縁者を頼ってカトマンドゥ等に移住する。村人の季節移動先が親類縁者の家であることから、何らかの形でカトマンドゥや地方都市に住む親族との関係があることが明らかにされた。

	開業年	部屋数	ホテル開業以前の活動	季節移動
①	?(1983)	3	農業	冬季カトマンドゥ
②	1970s?(1996)	16	東南アジア・カトマンドゥでビジネス	冬季カトマンドゥ
③	1980s?(1992)	6	香港、シンガポール、タイで衣類ビジネス	冬季カトマンドゥ
④	1983	30	タイ、香港でビジネス後、カトマンドゥでビジネス	冬季カトマンドゥ
⑤	1983	18	タイでビジネス	冬季カトマンドゥ/マナン
⑥	1988	25	シンガポールとカトマンドゥでビジネス。(父はインド、シンガポール、香港でビジネス、1950年代に開業した民宿を後継・新規開業)	なし
⑦	1989	22	マナンの外の学校で勉強	兄家族と交替で冬季カトマンドゥ
⑧	1996	16	卒業後、カトマンドゥで親戚のホテルで働きながら教鞭	冬季カトマンドゥ
⑨	1998	20	タイ、マレーシア、香港で計20年近くビジネス	冬季カトマンドゥ
⑩	1998	3	農業	なし
⑪	1998	5	カトマンドゥに住んだ後、香港、シンガポールでビジネス	NA
⑫	2000	29	香港で工芸品のビジネス、その後カトマンドゥでビジネス	冬季カトマンドゥ
⑬	2000	9	NA	なし
⑭	2002	5	マレーシア、香港、シンガポールでビジネス後、1994年にマナンに戻って政治活動	冬季地方都市

20世紀半ばからトランスナショナルな貿易を行っていたマナンの人々は、20世紀末の経済の自由化に伴い相対的に勢いを減じ、その代わりにそれまでに蓄積してきた資本や経験を生かしてツーリズムに参入するようになった。ネパールにおいてツーリズムが基幹産業に位置づけられた1980年代からマナンの人々のツーリズムへの参入が目立つようになったのは、筆者がこれまで研究してきたカトマンドゥにおいても指摘できる。他方、近年ツーリズムへの参入が見られなくなった大きな理由は、政情不安によるツーリスト数減少に他ならない。

マナンにおいてロッジが開業するようになったのは1970年代からであった。自然発生的にツーリスト向けのサービスが生じるようになったが、ホテル業として発展するようになったのは上述したように1980年代以降といえる。ホテル経営者はマナン出身者で占められ、ホテルを開業する以前は殆どが国際貿易に従事していた。表中の①から③のホテルでは、当初外国人ツーリストに自分達の食事と同じもの(ソバの無発酵パンやソバや麦を熱湯で練ったもの)を出し、自宅の空いているスペースにゴザを敷いて寝かせていたという。ホテル仕様の建物が建てられるようになったのは、1980年代から1990年代にかけてのことである。また、今日ではベーカリーを併設するホテルもあり、各種パンやアップルパイが、繁忙期にはカトマンドゥの有名ホテルで働いているコックや有資格のコックが雇われ、パスタやピザ等欧米人の好みに合わせた食事が提供される。物資の輸送が困難であるために生鮮食品が欠乏しがちであるが、温暖化と栽培技術の普及によりホテルの庭で外国人向けに野菜を栽培するようになり、それらが地元の人々の食生活に加わるようになった。

社会の背景にある近代化やグローバル化に臨機応変に対応して、マナンの人々はマナンでもカトマンドゥでも、また外国においても商機を見出し、企業活動を行ってきたといえる。

#### (4) 村の開発

上述したようにツーリズムに参入する人々が増えるにつれ、旧村の外側に新しくロッジやホテル、レストランが立ち並び新村ともいえる一角が出来上がった。これに対し、旧村には寺院や学校があり、従来から村の機能が集積している。ツーリズム産業の経営者は旧村の人々で、外部者はいない。旧村内部を従来通り平安に維持するための開発の仕方といえよう。

また、ツーリズムの影響はインフラストラクチャーの整備にも見出せる。ツーリスト誘致という目的でもあり手段でもあるが、

川沿いで行っているマイクロ・ハイドロ・プロジェクトや、車道を開通させるための工事への協力が見られる。ツーリズム産業による村における利益の蓄積がこのような形でインフラ整備に再投資されていると考えられる。

#### (5) 今後の課題

車道から徒歩一週間かかるマナンに、4、5年以内に車道が到達する予定である。これに対し、村人は戸惑いを禁じえない。これまでマナンでは食べられなかった生鮮食品が入手可能になり、医療機会や教育機会にアクセスしやすくなる。これらのことは村人の生活の質の向上につながり、期待される場所である。しかしながら、他方で辺境であるがゆえにツーリストを含め来訪者はそれほど多くなかったのが、車道開通によりツーリストとともに部外者の流入が増大することが見込まれ、見知らぬ者が増加することへの不安も強い。

このような不安を抱くのは、マナンの西、峠の向こう側のトレッキング街道沿いに位置するムスタンに、2008年に車道が開通したのを見ているからである。人口流入が激化したことに加え、人の動線が変わった。ツーリスト増加に伴い建築ラッシュが起きている村がある一方で、これまで数日間かけてツーリストが歩いていた距離を一日で移動するため、ツーリストが素通りするようになった村が出てきた。このような村ではロッジ等ツーリズム産業が衰退していくのを食い止めるのは非常に困難であり、生活の変更を迫られている。

他方、自然に依拠したトレッキングが魅力であるムスタンやマナンで車道の開通のような開発や近代化は、同時にツーリストの魅力減退につながる。非近代を求めるツーリストの意識の是非はここでは問わないが、いずれにしても近い将来、大きな変化が生じることは避けがたい。これらの変化は先述したように、ネパール全体の近代化、またグローバル化を背景に起きていることでもあり、グローバルな視点からのさらなる研究蓄積が必要であろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 森本泉、「ヒマラヤをめぐる環境問題－ネパール北西部マナンの事例」『日本地理学会2008年春季学術大会シンポジウムVIII「地域環境」をどう捉えるのか?～フィールドワークによる現場からの発想～報告論文集』, pp. 11-14, 2008年3月30日(査

読なし)

- ②森本泉、「トウリストの来た道を遡行する—アイルランドに渡った出稼ぎネパール人ガンダルバの事例」、『お茶の水地理』、2008年3月、第48号、73—89頁（査読なし）
- ③森本泉、「カースト社会」における浄—不浄関係とその実践—ネパールの楽師カースト・ガンダルバを巡って—『人権と部落問題』2008年6月、第774号、64—69頁（査読なし）
- ④Morimoto Izumi, The Changes in cultural practices and identities of a Nepali musician caste: The Gandharbas from wandering bards to travelling musicians, *Studies in Nepali History and Society*, 13(2), 2008, pp. 325—349 (2010年3月刊行) (査読あり)

[学会発表] (計3件)

- ①森本泉、「ヒマラヤをめぐる環境問題—ネパール北西部マナンの事例」日本地理学会 2008年度春季学術大会、2008年3月30日、獨協大学
- ②MORIMOTO, Izumi, The Impact of Global Tourism on the Gandharbas in Nepal, The 31st International Geographic Conference in Tunis, Tunisia, 14, Aug, 2008
- ③森本泉、「ヒマラヤの環境・社会をめぐる変化とツーリズムの展開—ネパール北西部マナンの事例—」人文地理学会 2009年度大会、2009年11月8日、名古屋大学

[図書] (計1件)

- ①森本泉、「ネパールにおけるツーリズムの展開とツーリズム空間の形成」、神田孝治編『観光の空間 視点とアプローチ』ナカニシヤ出版、89-99頁、2009年10月（分担執筆）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森本 泉 (MORIMOTO IZUMI)  
明治学院大学・国際学部・准教授  
研究者番号：20339576

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：